授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2831 号

Glenoid Bone Loss Is a Risk Factor for Poor Clinical Results After Coracoid Transfer in Rugby Players With Shoulder Dislocations

ラグビー選手の肩関節脱臼に対する関節窩骨欠損は烏口突起移行術の術後成績不良の危険因子である

渋谷 研太（しぶや けんた）

博士（医学）

論文内容の要旨

コリジョンスポーツにおいて、烏口突起移行術による肩関節制動術は、再脱臼が少なく、有効な治療法である。しかし、術後成績不良の危険因子や Bristow 法と Latarjet 法の 2 つの方法の優劣は不明である。本研究の目的は、ラグビー選手の大規模コホートにおいて、烏口突起移行術の術後成績不良に影響を与える因子を特定し、Bristow 法と Latarjet 法の術後成績を比較することである。2014 年から 2018 年にバンカート修復を伴う烏口突起移行術を受けた、154 名のラグビー選手の計 169 肩（平均追跡期間 3 年）を対象とした。最初の 92 肩（84 選手）が Bristow 法で、後の 77 肩（70 選手）に Latarjet 法が行われた。術後成績不良は、Rowe スコアが 70 点未満かつ WOSI スコアが 630 点以上と定義した。主解析は、術後成績不良に影響を与える因子を特定するために、多重ロジスティック回帰分析を行い、副解析は、Bristow 法と Latarjet 法の術後成績と合併症発生率を Mann-Whitney U 検定を用いて比較した。92.3%のラグビー選手が術後平均 5.9 ヵ月で受傷前の競技レベルに復帰した。Rowe スコアと WOSI スコアは、肩の機能が術前と比較して術後に改善したことを示した。術後成績不良となったラグビー選手は 18 名（10.7%）であり、20%以上の関節窩骨欠損が、術後成績不良と関連していることが示され（オッズ比 9.8）、Bristow 法と Latarjet 法の術式による影響はなかった。また、術後成績と合併症の発生率において、2 つの術式間に差はなかった。本研究により、術後成績の最も効果的な予測因子は、関節窩骨欠損の程度であり、Bristow 法と Latarjet 法の術式によらないことが示された。